

「読むこと」は変わったのか

高木 まさき

「読むこと」の力をつけるために学ばなければならないことは変わらない



高木まさき（たかき まさき）
一九五八年 静岡県生まれ 横浜国立大学教育人間科学部教授 光村図書国語教科書編集委員
主な著書に、『他者』を発見する国語の授業（大修館書店）、『本の世界』を広げよう（共編著 東洋館出版社 など）

— 今の学習指導要領では、以前のものと比べて、「読むこと」の扱いは変わったと見るのでしょうか、変わらないと見ればいいのでしょうか。

時間数が減ったとか、主題という言葉がなくなったとか、「気持ち」の読み取りが高学年だけになったとか、いくつか変化はありますが、読みの力をつけるために学ばなければならないことは、基本的には変わっていないと思っています。詳細な読解についても、詳細な読解に偏りすぎることが否定されたのであって、すべてが否定されたわけではありません。

そのなかで、学習指導要領に言語活動例が入ったのには、一つは、「読むこと」を、詳細な読解だけではなくて、活動的に楽しんでもやることがあっているだろうということですね。もう一つは、今までのような講義調の読みの授業では、子どもが受け身になってしまって、自分で考えて読んでいない。いろいろな活動を行うなかで子どもの頭を働かせようというねらいもあったと思います。

— 光村図書の十四年度版の教科書では、今のお話にあった言語活動を「読むこと」の学習の随所に取り入れましたが、その効果はあったのでしょうか。

現状がねらいどおりにいっているかという点、活動ばかりになってしまったり、読みの力をどうつけてきたかがあいまいになってしまっているということがあ

ります。例えば、「ためぎの糸車」（一年）で紙芝居作りをしますが、そのとき、紙芝居を作らせることに読みの学習としてどんな意味があるかということをやんと押さえて活動をやっていくことが大事なんです。ところが、それを忘れてしまうと、紙芝居の絵をかくことだけに一生懸命になってしまふ。その意味では、活動を取り入れた効果は、まだ十分に発揮されていないですね。

— そのような学習がうまくいかないのはなぜでしょう。読みの時間数が減っていますから、少ない時間で活動しながら読むことは難しいという声も出ているようですが。

それぞれの作品を読むことにどれだけ時間をかければいいのかというのは難しいですが、反対に、かけられる時間によっていろいろな読み方が考えられると思うんです。特に、時間が少ないほど、その作品でどこが大事なポイントなのかを見きわめていく必要があると思います。活動を取り入れる場合も、作品の特徴をつかんで、そこからこの作品ではどういう表現を押さえていくか、そのためにはどんな活動がふさわしいかということをやっていると見ていくことが大切です。考えなきやいけないのは、かつて、あれだけ時間をかけて読解を一生懸命やったのに、子どもたちはほとんど国語ざらいになっていつてしまったという事です。そこを忘れちゃいけないですよ。

— 作品の大事なポイントをしっかりとらえて子どもたちに合った指導をしていくということは、言うのは簡単ですけど難しいですよ。

活動を取り入れた読みの学習で大事なことは、なんのための活動かを意識すること

読むことは、作品によって 学習のしかたがいろいろあ っていい

教科書は全国向けですから一般的にしか作れない。教科書はそういう意味で限界があるわけですが、その限界の中でどれだけ示せるかということは考えなきゃいけないですね。光村の新版教科書でもいくつか新しい工夫をしています。例えば、活動を取り入れた単元と、読むことだけを目的にした単元をはっきり区別したり、どの単元も読みのポイントを絞ってはっきり示したりしました。読みの時間も増やしました。ただ、クラスに合った、あるいは一人一人に合った授業にするためには、最後は先生たちの見きわめる目が大事です。作品のポイントをつかむには教材研究が大事ですが、実はそのときにもう一つ気をつけなきゃいけないところがあります。例えば、紙芝居が有効な作品、ペープサートでなきゃいけない作品、動作化することが合ってる作品というように、作品に合った活動があるっていいことですよ。

—そうすると、これからの「読むこと」は、常に活動を通して学習していくことが求められるわけでしょうか。

いや、それは作品によって、場合によって、いろいろあっていいんじゃないでしょうか。活動を取り入れながら作品のよさをしっかり読み味わうのに適している作品もあれば、従来型というのは変かもしれませんが、じっくり読解するとか、読み浸っていききたい作品もあるわけです。その選択も含めて先生が見きわめていていただきたいんですね。もちろんさっきの時間のかけ方ということも合わせてです。教科書に示されている活動や読み方は、あくまでも一つの例です。

新しい「読解」の方法として 提案したい「おもしろさ から始める読みの授業」

—今のお話にあった「じっくり読解する」というときの「読解」とは、「詳細な読解に偏らない」というときの「読解」と同じものなのでしょうか。

読解のスタンダードって難しくて、先生によってもイメージが違うと思うんですよ。一般的に考えられるのは、教材を一度通読した後、場面に分けて順番にそのときの場面の様子や人物の気持ちを考えながら一行一行表現を追っていくというような読みですよ。そこで問題なのは、なぜそう読まなければいけないのかということが子どもによくわかっていないということです。わからないままに一行一行分析させられるので、子どもたちはうんざりして疲れ切っているんです。ですから、そこは見直さなきゃいけないと思います。

そこで考えたんですが、初めから順に読むのではなくて、作品のおもしろいと思った場面から読めばいいじゃないかと。おもしろかったと思うところでもず立ち止まって、「どうしておもしろかったんだろう」と表現に即して考える。そうか、この場面のおもしろさはよくわかるけれども、じゃあ、ほかの場面はどうなのかと考える。つまり、おもしろいところから読んでその理由が見きわめられれば、それをもとにして初めの場面やその他の場面がだんだん位置づいてくる。なぜそこを読んでいくかの意味がわかる、という読み方です。

説明文でもなんでもそうだと思うんですが、中心的なものがわかってくるからこそ、ほかのものが位置づいていることの意味が見えてくる。そうすると、場面意識や段落意識をもてるようになる。「読むこと」にはそういう力が大事で、教育課程実施状況調査を見ても、子どもたちは、場面が変わったりすると関係づけられなくなっちゃうんですね。

子どもたちの思いから読みが始まるということでは、確かに今までの「読解」とは違いますね。新しい「読解」のあり方を考えていかなければいけないというふうに感じます。

わたしとしてはそう考えています。そのことをいろんな人が考えなくてはいい時代になってきていると思います。子どもたちは活字離れしていますから、以前と同じことを繰り返しても、前よりさらに悲惨な結果が待っているような気がするんですね。

なんのために読み物を読むかというと、読むことがおもしろくなるということです。そのためにはもちろん力がつかなければならぬわけですが、これからの読みの学習は、おもしろさということを考えないと無理だと思ってしまう。戦後ずっと、ひたすら細かい正確な読みということが追求されてきて、そのことと子どもたちが読みから離れていくということが同時並行的に進んできたわけです。もちろんこれは国語教育だけの問題じゃないですが、細かい正確な読みが、子どもたちを読みの世界に戻す力にはならなかったんですね。

教室で学習する読みのおも

しろさは、一人一人の違い
た読み方が交流できること

読みのおもしろさというのは、本来一人一人違うものですよ。教室で学習する読みのおもしろさとはなんでしょう。

教室でみんながいつしよに読むことのおもしろさというのは、いろんな読み方が出てくるということです。そのなかで自分の読みが変わっていったり、変わらなくても、ああいう読み方もあるのかということに気づいていく。そういうなかで読みの力を育てていくということが大事です。ただ、それが今のところ、「みんな違ってみんないい」のままで終わってしまっている。活動も「みんな違って

みんないい」で、一人一人が何をやったのかわからないままになってしまっている。これでは、みんなで読むおもしろさはつかめません。そのところをこれから試行錯誤してみんなで考えていかなきゃいけないと思っています。例えば、さっき言った「おもしろさから始める読みの授業」も一つの考え方だと思っています。

おもしろさを味わえるためにも読みの力が必要なのではないかと思っています。教室でつける読みの力とはなんでしょう。

一つ一つの作品でどんなところに立ち止まって読むかを意識できるというのがその読みの力になると思います。初めは先生が立ち止まるべきところを気をつけて指導していかなくちゃいけないけれども、作品の特徴を生かしながら、具体的に子どもたちに読み手の経験をさせていくということが必要なんだと思います。昔の読解はそういうことをきちんとやっていたんですが、ベターッと満遍なくやっちゃうもんだから、子どもたちは何が大事なのかわからないわけですね。もうちょっと焦点を絞ったほうが、読みのポイントがはっきりして、子どもたちは見えやすくなると思います。全部同じように扱っちゃうところに問題があったと思うんです。焦点を絞った授業をやっても時間が余ったなら、もっとほかの作品を読めばいいんじゃないですか。

国語というか、言葉の学習でいちばん大事なのは、どれだけ言葉のシャワーを浴びるかということだと思います。教科書で読み取りの基本を学んだら、どんどんどんどん読んでいつて、あるいは先生が読み聞かせてもいいし、そういうなかで言葉のシャワー、物語のシャワーをいっぱい浴びるということ、たくさんものに触れていくということが大事なんじゃないかなと思うんですよ。

読みの力は、読むべきところが意識できること、大事なものは、物語のシャワーをいっぱい浴びること